

あぜみち

◆海に生きて

岩手の湘南といわれる波静かな広田湾で産湯を使い、齢六〇数年碧い海に癒されながら、母なる海に抱かれて老いるこの身を幸せに感じております。海辺をホームグラウンドにして育った私が、縁あって嫁いだ夫は船乗り。義父母とともに留守を守る私は家業であるワカメ、のり、かき養殖の仕事に精一杯働いてきました。子育てをしながらの養殖業は決して楽なものではありませんでした。暗い早朝からの重労働に家事一切の日課は、苦しいながらも若さと意地でがんばる日々でした。

そんな折漁協婦人部の役職につき、部長歴八年。県の役などいそがしい日々が続いています。主な活動として、合成洗剤追放運動、貯蓄推進、魚食普及、漁家生活改善計画、青少年健全育成（後継者問題）等々があります。新鮮な魚を食卓への願いをかけて「食の匠」の認定を受け、産業まつりや大漁まつりのイベントを通して魚料理の普及に努め、消費拡大も図ってきました。また、当広田町漁協が長く力をいれてきた資源保護活動でも、アワビ開きの日は部員が出勤して船検査にあたるなど乱獲防止や資源保護に取り組み、今や婦人部の仕事として定着するまでになりました。板子一枚千両といわれた古きよき時代の

漁師ぐらしは、今や夢と消えました。現在の漁業のゆくえはきびしく暗いといわれます。漁獲高の減少、空とぶ高級魚の輸入や中国ワカメ問題等の流通事情、避けて通れない後継者問題、課題は山積しています。

しかし私は思うのです。悠久の彼方から自然がくれたこの宝の海を守り育てながらその恩恵にあずからない手はないと。広田湾はまだまだ生きています。きれいです。栄養のある活きた魚が頂けます。感謝しています。六年前夫と死別、今は一人で船を操り、ウニ、アワビ開口に出ます。海と共に喜びを体で感じる浜の母ちゃんをやっています。漁師冥利の人生、海をこよなく愛しています。若い人達よ、このすばらしい海で、定年のないこの海で、漁に生きることを選んでみませんか。

（岩手県陸前高田市 佐々木典子 漁業）

◆田舎暮らしの憂鬱

就農して一年半が過ぎようとしている。初年度は五種類程の鉢花を生産出荷したが、良い物が出来たと思っている。市場の価格はこちらの思いどおりにはいかなかったが、二年の月日をかけて農地を探し、日照時間標高共に花作りに適し、都心へのアクセスも良く、流通の面でも恵まれている場所である八ヶ岳南麓に辿り着いたのだが、ここへ来るまでが大変であった。

村役場の農業委員会を介して地主を交えて話し合い、一反三万円である農地を借りることが決まった。その後、菓子折りを下

げて地主のところへ御礼と挨拶をしに行きたところ、井戸を掘ってはいかん、地代はお宅の収入に見合った額をよこせ、初年度は四万円でもいいが地代は一年ごとに見直す、言い出した。役場での話し合いで決まったことなどまったく構いなしである。良い土地だったので残念ではあったが、役場に申し入れて話は無かったことにして貰った。すると次の日、地主から電話があり、お宅のお陰でうちは一年で二分、八万円の損失をこうむった。どうしてくれる。」と言ってきた。まともな話が出来ない相手である。元小学校教師の頑固な老人は自分の言い分が全く正しいと思いついて五千元の虎屋の羊羹を返してくれ。

数日後、二番目の候補地を借りることにし、その旨役場の農業委員会に伝えたのだが、待てど暮らせど連絡が無い。しびれを切らしてこちらから連絡してみると、なんと農業委員会の担当者はヘルニアで急遽入院し、役場の誰にも私の農地借り入れの件を申し送っていないのであった。就農認定会議の期日が迫っているので必要提出書類を全部準備していたのだが、農業委員会の代理の若い女性は全く役にたたず、二ヶ月に一度の会議に書類を提出することができなかった。これで借地の契約を結ぶまであと二ヶ月じつと待たなくてはならなかった。かような困難を乗り越えて、田舎暮らしを実現している。

（山梨県高根町 杉原正俊 農業）